

〈文化史学会第十八回大会発表要旨〉

古代エジプト史と「世界史」

吉 成 薫

古代エジプト史の世界史的意義、古代エジプト史がどのように「世界史」と関連づけて扱われて来たかを検討する。ドイツの代表的古代史家エドワルト・マイヤーが「あらゆる歴史学は必然的に世界史でなければならない」と表明し、その『古代史』の中で展開したというエジプトの「世界史的叙述」については確認できなかった。ベルギーのエジプト学者ジャック・ピレンヌ（ヨーロッパ中世の誕生について有名なピレンヌ・テーゼを提示したアンリ・ピレンヌの息子）は、『世界史における大きな潮流』という「世界史」を著わし、その中で「古代エジプトに循環が最も特徴的にあらわれている」とし、循環史観に基づきエジプト史を同様の継起的段階が見られる三時期に分け叙述した。マックス・ヴェーバーは『古代社会経済史』の中でエジプト史が古代社会において打ち出した二つの制度を（１）ライトウルギー（対国家奉仕義務）原理と（２）官僚制的行政と名づけ、エジプトはこの二つの制度を最初にしかも再び到達できない完璧さをもって実現したと位置づけている。西欧文明の諸要素の起源として古代エジプトの文化事象があると述べる、高校「世界史」の西欧文明中心史観的視点は問題外として、上述した先人達の発想を参考に古代エジプト史の「世界史的意義」を考え続けて行きたい。

ラモン・カザス《貞奴の肖像》再考

木 下 亮

一九〇〇年のパリ万博で大人気を博した貞奴と川上音二郎一座は、翌年から再度ヨーロッパ各都市で巡回公演をおこなった。だが、その詳細については、調査の進んでいるウィーン公演を除くと、不明な点が多く、とりわけイベリア半島での公演については先行研究が皆無の状態である。そこで当地の新聞や雑誌記事を調査し、彼らが一九〇二年五月にバルセロナのノベダデス劇場で公演をおこない、さらにマドリッドやリスボンで公演を続けたことを確認した。

バルセロナ滞在中、貞奴は画家ラモン・カザスによって椅子に腰掛けた洋服姿で描かれている（カタルーニャ美術館蔵）。一方、貞奴の舞台の着物姿は、万博のときパリで出版された雑誌に掲載された写真を通じて知られ、若きピカソがスケッチを描いたほか、ポスターや陶器の人形などにより広まった。このような異国趣味を前面に出したイメージと比べ、純粹に肖像として描かれたカザスの貞奴は、肖像性を強調した例外的な作品として注目される。カザスは数多くの同時代の芸術家を描き、その肖像は写真リトグラフによって複製され、芸術雑誌『ペル・イ・プロマ』の頁を飾ったが、そこには異国の女優が何人も含まれていた。貞奴の肖像は、バルセロナにおける国外の文化の活発な受容のなかで描かれたのであった。